

はずかしいのは 私の気持ち？

昨年の暮れのことです。5日間のクラブ合宿が終わって帰宅すると、親戚の人の声が聞こえました。いつもと違った雰囲気なので、何かあったのかなと思っていますと、私の帰りを待っていたかのように玄関へ駆けてきた母から祖父が亡くなったことを聞かされました。私は一瞬、頭の中が真っ白になり、「うそだ、うそだ。」と心の中で叫び続けました。

祖父は8年前に脳血栓で倒れ、その後、右手と右足が麻痺して動かなくなり、やがて言葉も不自由になって、入退院する生活が続いていました。そんな祖父は、私のサッカーの試合があるときは、母とともに車椅子で応援に来てくれていました。いつしか私は、試合に出るたびに、応援席にいる祖父の姿をチラッと見ては、安心感と元気をもらうようになりました。

しかし、祖父が倒れて間もない頃は、祖父がグラウンドに試合を観に来ることがいやでたまりませんでした。

私は母に「おじいちゃんをどうして連れて来るの！はずかしい！試合に集中できん！笑われる！」とぶつけました。

すると母は「おじいちゃんを見て笑うのは誰なの？あなたは、おじいちゃんのどこが、何が、はずかしいと思っているの？」と問い返してきました。

私は、この母の言葉に言い返すことができませんでした。

さらに、母は続けました。「おじいちゃんは、自分の力だけでは動けない身体になってしまったけど、あなたの試合を観に行くのを楽しみにしているのよ。あなたがゴールを決めたときのおじいちゃんの喜びかたは、そりゃすごいわよ。強力なサポーターじゃない！はずかしいのは、あなた自身の気持ちじゃないの？」と言ったのです。

「はずかしいのは私の気持ち？」という母の一言を何度も自分に問い返してみましたが、なかなか納得できませんでした。

そんなある日、介護用品のお店に「あなたの未来をあなたの鏡が映し出す、お年寄りを大切に、あなたも行く道だもの」と書かれているのを見かけて、ハッとさせられました。

それまでは、誰もが年をとっていき、誰もがいつ車椅子の生活になるかもしれないということを考えたことがありませんでした。それに、私は、周囲の人のことばかり気にして、祖父の気持ちをわかっていなかったのです。結局、自分自身が勝手にバリアを作っていたということが少しずつ理解できるようになりました。

母の言葉を受け止められるようになるまで、少し時間がかかりましたが、それからずっと、祖父は私にとって一番のサポーターです。

「おじいちゃん、応援ありがとう！これからもずっと私の心のサポーターだよ。」